

みんなでお昼

蜜瀬かえで 著

あの日の放課後以来、玉置は毎回お料理研に顔を出すようになった。

入部した訳じゃないけど、私が調理をしていると、隣にやってきてその様子を黙々とスケッチしている。

絵に描かれるのはちよつと照れくさいけど、真剣な顔でスケッチブックと向き合っている姿はなんだかほえましくて。

でも、そうやってついつい油断していると、すぐにつまみ食いしようとするのが困りもの。

「コラッ！」って、ここ数日でほんと何回叱ったものか。

——まあ、つまみ食いでも、あんなに嬉しそうに食べてくれるんだったら、悪い気はしないんだけど……。

(いやいやいや)

それはそれ。これはこれ。

うん、やっぱり食べてもらうんだったらちゃんとできあがったのを食べてほしいもん。

だから、やっぱりつまみ食いには断固とした対応を！
そうやって、おもわず手を握りしめてしめたとき——、

「おい、笹川」

はっと気がついた。

黒板の前で眉根を寄せる担任と、その声に教室中の視線が私のほうを振り向いていた。

首から耳にかけて、ゆっくりと熱を持っていく。

「……………すいません。聴いてませんでした」

前の席でかおりが笑いを堪えていた。

今の時間は、担任の間口先生の日本史の授業。

これが終われば、お昼休みだ。

それで、最近はお昼も毎日玉置と一緒にしてるものだから、ついつい玉置のこと考え出したりしちゃって……。うう、反省。

「で、だ。この頃の文化を国風文化と言って、源氏物語や枕草紙なんかが有名どころとして挙げられるが……」

別に当てられたとかじゃなくて、単に集中してないのを注意されただけみたいで、先生はそのまま授業を再開した。ほっと息をついてから、前の時計を見た。

授業終了のチャイムが鳴るまで残り数分。

だけど、この感じだったら少し時間をオーバーしても平安時代のところは全部終わらせるんじゃないかと思う。

1ページ前で平安に入ったと思ったなら、教科書の次のページはもう鎌倉だし。

ページを指で摘んで行ったり来たりしてみたら、増えていた板書に気づいて、慌ててノートに写す作業に入った。

.....。

タッタッタッタッタッタッタ。

「建築物としては、貴族の住居として寝殿造の建物が作られ、宇治の平等院がソレだな。十円玉の表のヤツっていうとわかるか」

.....。

タッタッタッタッタッタッタッタッタッタ。

.....。

「……藤原氏が権勢を誇ったのもこの時代で、平等院も藤原道長の別荘として——」

ガララッ

「未佑——っ！ おっ昼う——っ！」

ブチッ × 2

「——姫路いいっ！！！！」

「——玉置っ！」

教室の後ろのドアを開けて脳天気な笑顔で飛び込んできた玉置に、先生とわたしが叫んだのは同時で。

それに合わせるみたいに、ちょうどチャイムが鳴ったのでした。

「く？」

怒鳴られた当の玉置は、一人目をぱちくりさせていた。

「だってさ。まだ授業終わってないかと思ってなかったんだもん」

「なに言ってるの。あきらかにチャイム鳴るよりも早かったじゃない」

「おー、おつかれ」

「(こくこく)」

玉置の乱入でうやむやのうちに終わった授業の後。

玉置は早速、生徒指導でもある間口先生か直々にお説教を受ける羽目になった。

……なぜか先生からわたしも付き添いを頼まれてしまったのだけど。

これはやつぱり、もう先生たちの間では、わたしが玉置の係ということになってる、ってことなんだと思う……。眉間を押さえながらの先生のお説教に付き合うこと十分（ちなみに付き合うって言うのは、お説教される側じや

なくて、一緒にする側）。

やっと解放されたわたしたちが席に戻ると、先にお弁当を広げていたかおりとのんちゃんが出迎えてくれた。

「遅いから先食べてるよ」

「うん。遅くなってゴメンね」

言いながらも、中身がほとんど減っていないお弁当箱を掲げて見せたのは隣の席の『田中かおり』。

クラス委員をやってる優等生だけど、そんなにお堅い訳じゃなくて、意外とオシヤレとかにも詳しくて、この間はわたしも爪のお手入れの仕方を教えてもらった。

トレードマークはクセのあるショートヘアに細い銀縁のメガネ。

クールなように見えて、実はよく気の回る気遣いやさんで、さつきのお弁当も、わたしたちを待って食わずにいたら今度はわたしが気にしちゃうってわかっててわざとゆつくりしてくれたのだと思う。そのことを本人は、否定するだろうけど。

「なに？」

「ううん、なんでも。さあ、わたしも食べようっと」

「なにそれ」

「(にこにこ)」

そんなかおりの隣でおっとりと小さなお弁当を口に運んでいるのが『のんちゃん』こと『上野野乃子』ちゃん。おっとりマイペースな性格だけど、スタイルは抜群で、身長も平均的なわたしよりも10cmくらい高め。細いけど胸はたぶんDくらいあるんじゃないかなあつて思う。聞いたことはないけど。

いつも違う髪型は毎朝お母さんに結わえてもらつてるみたいで、今日はロングヘアのサイドが三つ編みになっていた。

あとはわたしと、玉置と、最近はこの四人で一緒にお昼を食べている。

玉置が加わったのはついこの間からだけど、クラスで浮いてるって割に、なんだかんだで人なつっこい玉置は、すぐにわたしたちの間にとけ込んでしまった。

今も、コッペパンをくわえながら、のんちゃんの三つ編みを手にとつて感心しながら眺めている。

「いいなあ。あたしもやってみようかな」

「もう、玉置ったら。ご飯食べてる最中でしょ。のんちゃん困ってるじゃない」

「(ふるふる)」

髪を玉置が持つてるせいで小さく首を左右に振つてか

ら、のんちゃんは染めた頬をはにかませ、

「……褒めてもらえるの、うれしいから」

「うんつ。褒めてる褒めてる！ほんとこれすつごくかわいいよつ」

「だから、ご飯食べてからにしなさいってば」

言いながら、玉置のほうへ卵焼きを差し出したら、ぱくつと食いついて、こっちに戻ってきた。

「……というかさ」

そんな玉置を見ながら、かおりが言った。

「なんで、いつもいつもコッペパン？」

「え？ 安いから」

対して玉置の返答は簡潔だった。

「やー、美術科つて入学してみたら、思ってたよりも画材代がかかっちゃって。おかげで食費をやりくりするのが大変で」

「だからって、また夕飯にポテチとか食べてるんでしょ？」

肉団子を差し出しながらわたしが言うのと、

「いいじゃん、べつに。安いんだし。はむ」

「そんなこと言つて、洋服とかにはすぐ使っちゃうくせに」

「それはそれ。はむ。そうだつ、昨日早速、かおりオスメのショップに行つただけだよ！」

「あー、昨日教えた？ ……てか、ホント早いわね。どうだった？」

「んー、なんか『大人』って感じだった」

「いや、それあんたの趣味が子供っぽすぎるだけだから」

「えー。いいじゃんかわいいの。 ……はむ」

「というか。また何か買ったんじゃないでしょうね？」

わたしが細めた横目で訊ねると、

「…………… (フイツ)」

あからさまに目をそらした。

(…買ったのね)

(…コッペパンなのに)

(もぐもぐ)

「はあ」

ため息つきながらもわたしがいたけの甘く煮たのを差し出すと、

「でさあ、いまでミウのお弁当最後だったんだけど。いいの？」

「え？」

あ。

かおりに言われて気づいたら、わたしのお弁当の中身は、きれいに全部玉置に食べさせてしまっていた。

…いや、あまりにおいしそうに食べるものだから、つい。

「あ、でも、こういうときのためにちゃんと、コンビニでパンも」

玉置にお弁当分けるのはいつものことだし、一応用意は… ……て、あれ？ たしか机の中に入れといたはずなんだけど…

「ふ？」

視線を上げると、隣でどこかで見えた練乳パンをばくついている玉置と目があつた。

「…玉置。それ？」

「あ、うん。そこにあつたから」

「……………」

「……………」

「たあー」

「まあー」

「きいー…つ…つ…!!!」

逃げ出す玉置を追って、わたしは教室を飛び出した。

「……あの二人もあきないわねえ」

「（もぐもぐ）」

残された教室で、かおりは呆れた風に言った。

慣れたもので、隣では野乃子がまだその体格の割に小さなお弁当をちびちび口に運んでいる。

その様子を頬杖ついて眺めながら、

「……確かに、今日のもよく似合ってるわね」

ぼんやりしてるけど、スタイルだけじゃなくて、顔立ちもモデルみたいにきれいに整ってるから、どんな髪型でもよく似合う。

毎朝母親が髪をいじりたがるのも当然だ。

しばらくは野乃子の三つ編みをいじって過ごしていた。

結局、玉置は途中で見失ってしまつて、あちこち探し回ったけど、見つからず、予鈴が鳴って教室に戻ってきた。

「みゅーちゃん、おかえり」

「あ、のんちゃん。ごめんねさつきは」

「（ふるふる） いいの」

のんちゃんの席はわたしの隣。前のかおりは今は席を外してるみたいだった。

わたしが席に着くと、

「あのね。机の中に」

「え？ わたしの？」

のんちゃんがわたしの机の中を指さす。

覗いてみると、確かにさつき見たときはなかったコンビニの袋が丸めて入ってる。

「さつき、タマちゃんがね。入れてったの」

「玉置が？」

「（くくくく）」

どうりで。

校内を探し回っても見つからないはずだ。

一番近くのコンビニまで走っても10分はかかるっていうのに。

取り出してみると、チロルが3つ入っていた。

三〇円かける3つで90円。たぶんそれが今の玉置のお財布に残ってた最後なんだろうな。

それと、

「あの子ったら」

スケッチブックの切れ端に、デフォルメした玉置が頭を下げてる絵。その隣に、

『ゴメンなさい』

「……怒られるって分かってるんなら、最初からしなかったらいいのに」

「ふふ」

のんちゃんは笑うとき、いつもはにかむように口元をほころばせる。

「どうしたの？」

「みゅーちゃん、さっきからなんだかお母さんみたいだなって」

「……………（ああ）」

どうりで。

それは、一緒に先生に呼び出されるわけだ。

「……まあ、悪い子じゃないのね」

玉置が置いていったチロルを口に運びながら、わたしは次の授業の用意を始めた。